

東京都社会福祉協議会  
東日本大震災による被災地の視察報告(総括報告)

大規模災害対策検討委員長 染谷一美

平成23年3月11日の東日本大震災を受け、震災からちょうど100日を迎えようとしている今般6月17日、東社協高齢者施設福祉部会、センター部会、介護保険居宅事業者連絡会合同で集約させて頂いた義援金を東北ブロック老施協にお届けさせて頂くとともに、被災地と東社協より介護職員派遣を行っている施設の視察を行いました。ここにご報告させていただきます。

□日時:平成23年6月17日(金)

□場所:宮城県仙台市社会福祉協議会(仙台市老人福祉施設協議会)

潮音荘(仙台市若林区)

春圃苑(気仙沼市本吉町)・・・東社協介護職員派遣対象施設

□参加者:高齢者施設福祉部会副会長 西岡修(白十字ホーム施設長)

常任委員 水野敬生(江戸川光照苑施設長)

センター部会長 今 裕司(あすなろみんなの家センター長)

介護保険居宅事業者連絡会副運営委員長 大久保孝彦(八王子保健生協専務理事)

大規模災害対策検討委員長 染谷一美(文京白山の郷施設長)

東社協福祉部高齢担当統括主任 熊谷紀良

潮音荘は、津波の直撃を受け、職員の懸命の避難活動にもかかわらずご利用者と職員とに犠牲者がでました。現在代替施設でご利用者の生活を守りながら、再開に向けて懸命の努力が続けられていました。

春圃苑は、震災によりライフラインが停止しましたが、幸い建物には被害が無かったため地域の要介護高齢者を多数受け入れ、地域住民、行政、東社協のほか多くの支援者の協力により、高齢者の生活が守られていました。

■6月17日(金)10:30頃 東北ブロック老施協役員との懇談(仙台市社協2階)

当日午前10時に仙台駅に集合し、東北ブロック老施協の事務局でもある仙台市老施協を訪れると、高橋仙台市老施協会長、折腹、千田両副会長、仙台市社協の事務局の方々に迎えて頂き、仙台市の高齢者福祉施設の被災状況、今後の対応などの説明を受けた後、義援金目録(総額 25,739,427 円)をお渡しすることができました。義援金が被災施設の皆様のために活用され、着実な福祉介護サービスの復旧により、安心して穏やかな暮らしの回復に、微力ながら役立つようお願いばかりです。

高橋会長からは、仙台市内の高齢者施設の被災状況、利用者や職員の方々の被害そして今後の復旧に向けての状況をお話し頂き、特に津波の被害により未だ避難を余儀なくされている利用者、職員、関係者が多数とのことでした。施設の復旧、再開に向けては、津波被害のない安全な地域への土地の確保をはじめ、困難な課題が山積していることなど、災害を想定していない現行制度がかえって壁として立ちほだかり、被災された直接のご苦労に加えて、行政との調整など難しい状況を感じました。また福祉職員が複数殉職された事を苦渋の表情でお話され、ご心労に心が痛みました。



義援金の贈呈(西岡副部会長、仙台高橋会長) 左より東京の大久保、今、西岡、仙台の高橋、折腹、千田各役員

■6月17日(金)11:30頃 特別養護老人ホーム潮音荘(仙台市若林区荒浜)

仙台市は地震そのものの被害は比較的大きくはなかった様子で、仙台駅周辺、市内の各所は、一部の建物の壁を補修している程度で、人も車も一見何事もなかったように感じられました。しかし潮音荘に向かう途中までは普通の風景でしたが、海岸から4<sup>km</sup>付近あたりから風景が一変し、まさに何もなく、途中でひっくり返ったままの自動車、大穴の空いた住宅、瓦礫の山が点在していました。潮音荘(ケアハウス、サービスセンター併設)は深沼海水浴場に近い海岸沿いの平地に設置されていましたが、私たちを出迎えてくれたのは無人の潮音荘でした。

施設前で、鈴木法人事務局長、潮音荘の早坂施設長からお話を伺い、施設内を案内して頂きました。

建物の外観はそのままですが、中に入ると、津波によりエレベーターのドアがひしゃげ、ドア、サッシ、内部の調度品、ベッド、介護用品、日常生活品などが流されてほとんどなくなり、がれきで埋め尽くされていました。利用者は同じ法人施設に避難されていました。特に1階部分の被害が大きく、海沿いのケアハウスの壊れ方が大きいようでした。利用者4名が亡くなり職員2名が殉職し、利用者1名が現在も行方不明です。職員は二階から更に狭い階段を上った三階部分にあるエレベーター機械室まで万一を考え数名の利用者を避難させていました。二階屋上から津波(引き)で遺体が流される場面を目撃した職員はPTSDになってしまったとのこと。

地震後約30分~40分で津波が押し寄せ、海岸の防潮林(松)をなぎ倒し、それらが建物に突き刺さるように流れ込み被害を一層大きくしました。(施設内の時計は3時55分を指したまま止まっていました)



潮音荘



1階の天井付近まで津波が押し寄せた

当日は雪が降り大変寒い中、停電し暗闇で余震が続く中一昼夜救援を待つ状況となり、利用者、職員ともに津波の再来などに怯え、大変な恐怖の中で過ごしたとのこと。屋上から自衛隊のヘリが見え、手旗信号が出来る職員が合図しましたが、近くの小学校(荒浜小学校)を先に救出するので少し待つように合図を受けたそうです。

鈴木峻法人事務局長から、家族会からも(建替を)スピーデイに対応して欲しい要望があり、今後移転建替を前提に考えているとのことですが、それまでの避難施設の確保、運営、建替に関しては現行制度の中では厳しく時間がかかり、市当局との話し合いをすすめているが、なかなか先が見えない。(国や県は)特別な対応で、利用者の生活が早く落ち着くようにして欲しいと言われていました。



施設の向こうは海。松林には小さな松のみが残る



居室や廊下に松林の松も流れ込んできた

#### ■6月17日(金)16時頃 春圃苑(気仙沼市本吉町) 東社協介護職員派遣施設

春圃苑は海沿いの崖上にある平屋の特養にセンター、包括、居宅が併設された施設でした。

阿部施設長、菅原事務長から現状報告を伺い施設を案内して頂きました。当日は都内介護支援の職員が交代の日で、ロビーで利用者とお別れ会を行っていました。

当時、海岸には21メートルの津波が押し寄せましたが、春圃苑の海側は25mの急な崖のため直接的な被害を受けず、利用者、職員、建物は無事でした。津波警報が鳴り、施設は万一のことを考え、駐車場脇の丘まで利用者を避難させました。ライフラインが止まり、雪が降っていて氷点下になり、暖を取るのが困難だったとのこと。施設内の石油ストーブ10台と、職員の自宅から10台借り、暖を取られたそうです。一時インフラが途絶えた中でも、備蓄品や地域住民の協力で、施設として機能することができ、電気は3月31日、水道の復旧は5月末に復旧しました。

施設機能が確保されていたことから、居宅のケアマネや包括の職員が地域の一次避難所をまわり、避難所では生活が難しい要介護度の重い高齢者を施設にお連れし、一時は100名程度の方々が避難されていたとのこと。廊下や食堂やあらゆる所にベッドやマットレスで高齢者が避難生活をしました。介護はセンターが休止しているので全体の職員と外からの支援者とで行いました。

自衛隊の給水車の支援だけでは水が足らず、洗濯は手洗いで節水し、職員が輪番で一日かけて沢に水を汲みに行きました。心のケアのチームが入ってくれ、お願いして2週間に1回を1週間に1回に増やしてもらったそうです。チームの派遣は5月で終了したが6月からボランティアで来てくれています。

避難者を含め高齢者は狭い空間で寝ているため、人との距離が狭く、履き物も内外が一緒のため感染症の集団発生を大変心配しました。職員もその事は承知していて掃除や消毒や口腔ケアなど力を入れていました。湿度は石油ストーブのため60から70%確保出来ていて、幸い感染症の集団発生はなく、ご利用者のエコノミー症候群を防ぐためのケアにも対応したそうです。肺炎が一時流行ったので土足を

禁止し、ベッドが足りないので地域からマットを借りて対応しました。避難者は10日から14日程度で90人台に減り、3月26日には群馬県より支援が入りました。地元の役所もボランティアに入ってくれました。

ご利用者は4月に入り7名入院し、103歳と104歳の方2名が亡くなりました。地域の病院には医師がいなくなりましたが、医療支援のチームや病院の理学療法士の方々の支援がありがたかったとのこと。職員も被災し、出来るだけ休みが取れるよう配慮したかったが、職員からシフトの提案（15、6時間程度の連続勤務）があり、休みをとれる状況に出来ました。そのような中、東京からの介護職員の支援に支えられ、心より感謝していますとのことでした。

携帯電話は3月23日復旧し、固定電話は4月30日復旧しました。食事は一時2食となりましたが、米は普段から一年分を備蓄し、食材も地元のスーパーが支援してくれたので助かりました。

私たちはご利用者の話を聞こうと、ご利用者の輪の中にはいると、一人のご利用者が「どこから来たの？東京？元気付けに来てくれたの？ありがとう…。私、家は全部流されちゃったのよ」と、すると隣のご利用者が「私も家がなくなっちゃったの」、そして、私の手をしっかり握りしめ、「私も、もう帰るところがないから、ここにいるしかないの…。もうこんな悲しい思いは沢山…」と、話されるご利用者の方々に返す言葉がなかなか見つかりませんでした。



春園苑で都内派遣介護職員とのお別れ会



春園苑も海沿いで崖は25m。21mまで津波が。

## ■まとめ

震災から100日を経ても、未だ安心できる状況に至らず、直接被災した施設だけでなく被災地域の多くの施設にとっても困難な状況が続いています。お話を伺い、現行制度、とりわけ介護保険制度だけでは、今回のような危機状況には十分機能しないこと、早急な復旧に向けて、現地の実情に応じた裁量が働く高齢者福祉制度の活用や新たな制度整備が急ぎ求められていることを強く感じました。

東京に戻ると、「がんばれ東北」のノボリを目にしたが、頑張らなくてはいけなのは被災地の方々ではなく、被災していない東京をはじめとする私たちではないだろうか。被災地の皆様が安心して元の生活を回復することができる目途が立つように、例えば制度の見直しや新たな制度づくりに向けて行政に働きかけるなど、私たちが「がんばる」ことだと実感しました。（西岡）

全体を通して言えることは、(被災後およそ100日経過しているからか)お会いした方々は、意外なほど冷静に現実と向き合われていて、前を向いていらっしゃるように思えた(内面には絶対に様々な思い・不安があるはずなのに)。だからこそ、私達は迅速かつ建設的な対応・援助を継続して行っていかなければ

ればならないと強く感じさせられた。(今)

機会を得て、仙台と気仙沼へ行った。車で移動すると、或る所から車窓の景色が一変する。報道で見た場面が目の前に広がり、思考が停止したようになった。案内していただいた方の説明も満足に受け止めることができなかった。何を学んだのか自問するが、情けないことに何もまとまらなかった。

帰京した翌日、朝、出かける用意をしている時、テレビから「被災地なんかじゃねえ。正念場なんだ。」という言葉が飛び込んできた。たしかに「被災地」という所に行ったが、其処は「正念場」であった。受身的な「被災地」ではない、不幸だ不幸だと嘆いてもはじまらない「正念場」であった。

「被災地」としてではなく、「正念場」として捉えたとき、前日見た光景が改めて迫ってきた。(大久保)

「潮音荘」には、津波によって、ご利用者や職員が犠牲になり、建物は、まさに廃墟。テレビでは、「ここにある瓦礫と呼ばれるものは、瓦礫ではなく、思い出です…」と、涙ぐむ被災者の映像見て、「そのとおりだ！」と、正義感のように思っていました。潮音荘の建物の中には、瓦礫、瓦礫と呼ばれる思い出すら何もなくなっている光景だけが広がっており、その正義感が無責任にすら思えました。そして、その光景は、津波は、命はもちろん、思い出もろとも押し流してしてしまったのだということを見せつけられ、涙が溢れることを止められませんでした。また、春圃苑では、長年、生活相談員として相談業務に携わってきた経験から、無責任に行く前は、寄り添って話を聞いてあげる事が出来るのではと、そんな思いで現地入りしましたが、そんな甘いものではありませんでした。避難所に身を寄せているご利用者の方々の声…。一つの避難所にそれぞれいろいろ立場が違うので、その中では自分のことを被災地、被災者全てのこととして話すことはできませんが、第三者の私たちにはこの今回見たままの現状を話し続けていかなければならないと感じました。そして、それは、一回きりの付き合いではなく、部会全体であれば、細々とでも拘わっていくことが出来るのではないだろうか、最低でも、離れた地から気にかけている人がいるということを伝えられるのではないか、いやそうでなければならぬのだと感じました。(水野)

平和な特養ホームの日常に、突然の大地震とその3、40分後の大津波。潮音荘の見学では、津波から必死にご利用者を守ろうとしている職員の怒号や表現できない状況、そして懸命な避難活動でも救えなかった命などを、壊され無人になった潮音荘が、その無念さを静かに語りかけてくるようでした。春圃苑では震災により、電気、ガス、水道がない中、施設は一次避難所から要介護高齢者を次々と避難させました。支援には近所の住民や行政マンや東社協をはじめ遠隔地の支援者が協力してくれたとのこと。食糧不足という地元のスーパーが食料を提供してくれ、水が足りないと皆が代わる代わる一日がかりで沢に水を汲みに行き、節水のために(雪が降る時期)洗濯は手で洗った…。目の前の高齢者を守りたいという福祉従事者の心意気が人々に伝播し、自助、共助、公助のムーブメントになったと感じました。自らも被災している職員、大変厳しい現実の中で指揮された施設長と事務長。そこに一つの福祉の原点と普遍性を見せて頂いた気がしました。(染谷)

今回、大変お忙しくご苦勞の多い中で、私たちの訪問に親切に対応していただいた施設や関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

末筆に、東日本大震災で被災された全ての方々、直接的に被災されなくても、風評被害に苦しむ全ての人々が、1日でも早く、心から復興していくことを祈り続けたいと思います。(一同)